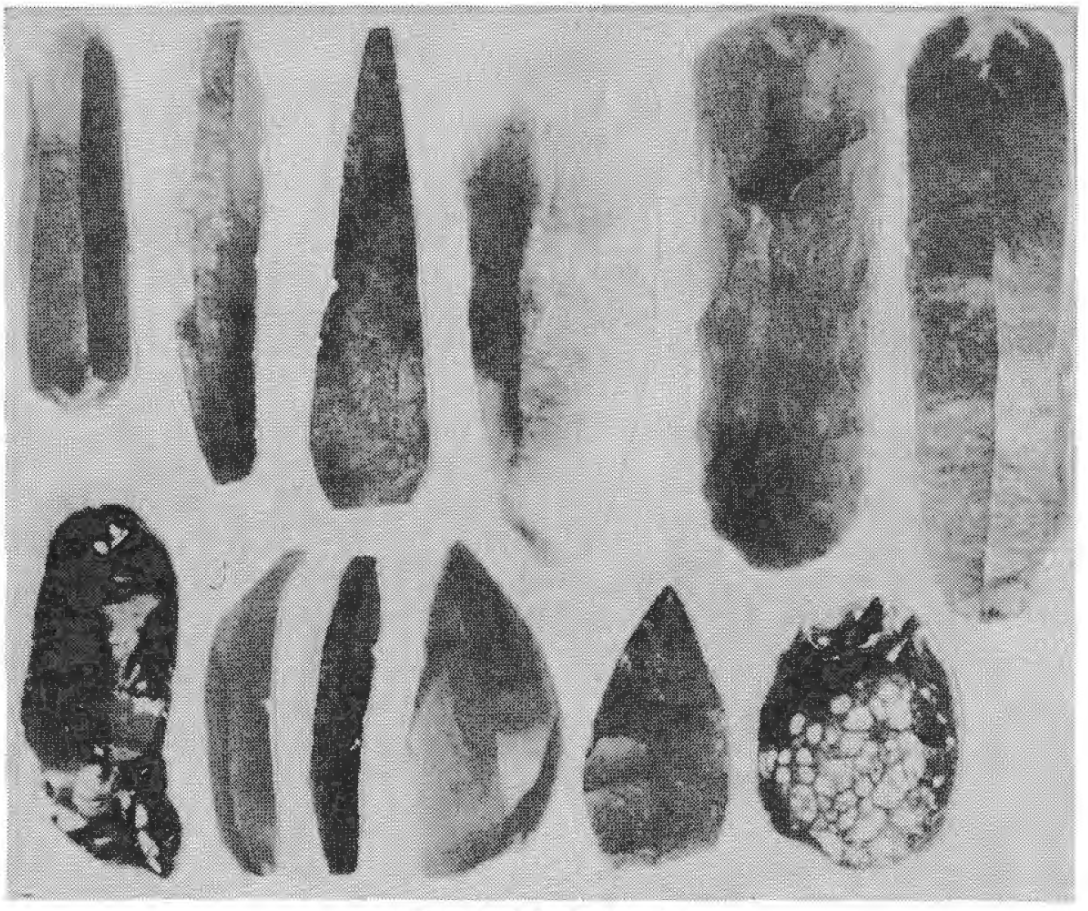
第二篇　考　古

七戸町では、現在まで確認された遺跡は四五ヵ所にのぼっている。しかし、発掘調査された遺跡は山館遺跡一ヵ所であり、七戸町の歴史を考古学的に復元することは、資料が少なくむずかしい。そのためここでは表面採集資料や、耕作中に偶然発見された資料をもとに、他地域の資料をも参考にしながら記述することにする。

第一章　旧石器時代

土器を製作することなく、簡単な石の道具を使用していた時代を旧石器時代と呼んでおり、その年代は人類がこの世に出現してから紀元前一万年ころまでである。

旧石器時代の人々の道具は石槍やナイフ形石器・骨角器が主なものであり、まだ弓矢は製作していない。石槍を手にしたハンターとしての毎日であったと思われる。したがって彼らの食卓には、動物の肉があがることが多



東北町長者久保遺跡出土石器

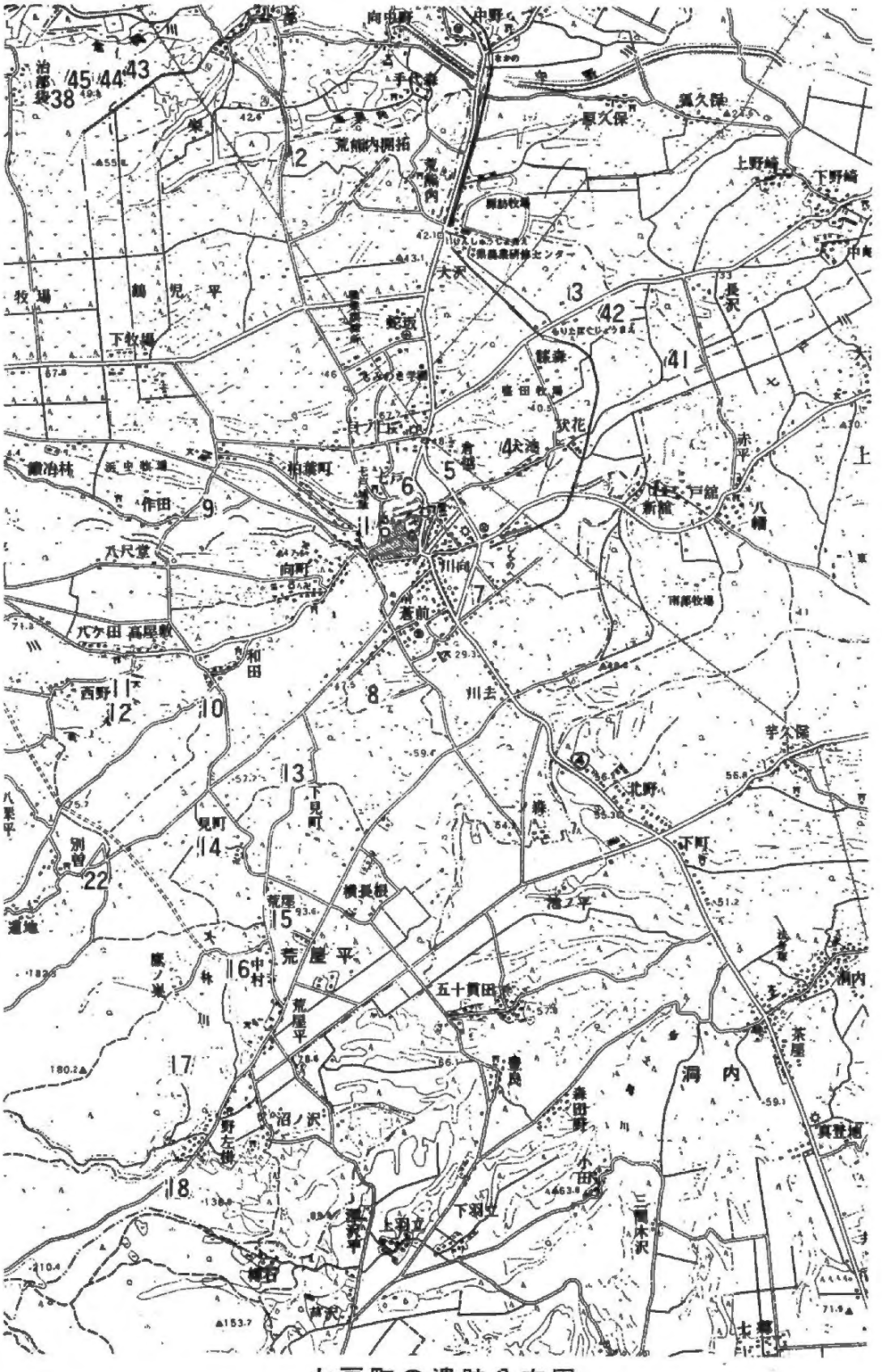
かったことだろう。マンモスやクマなど大形で獰猛な獲物を狩る時は、人々が力を合わせて落し穴や湿地に追いつめたことだろう。

彼らの住居は、洞窟や岩陰等であり、自然の地形をそのまま利用したものである。また、衣類としては動物の皮が加工されたと考えられる。

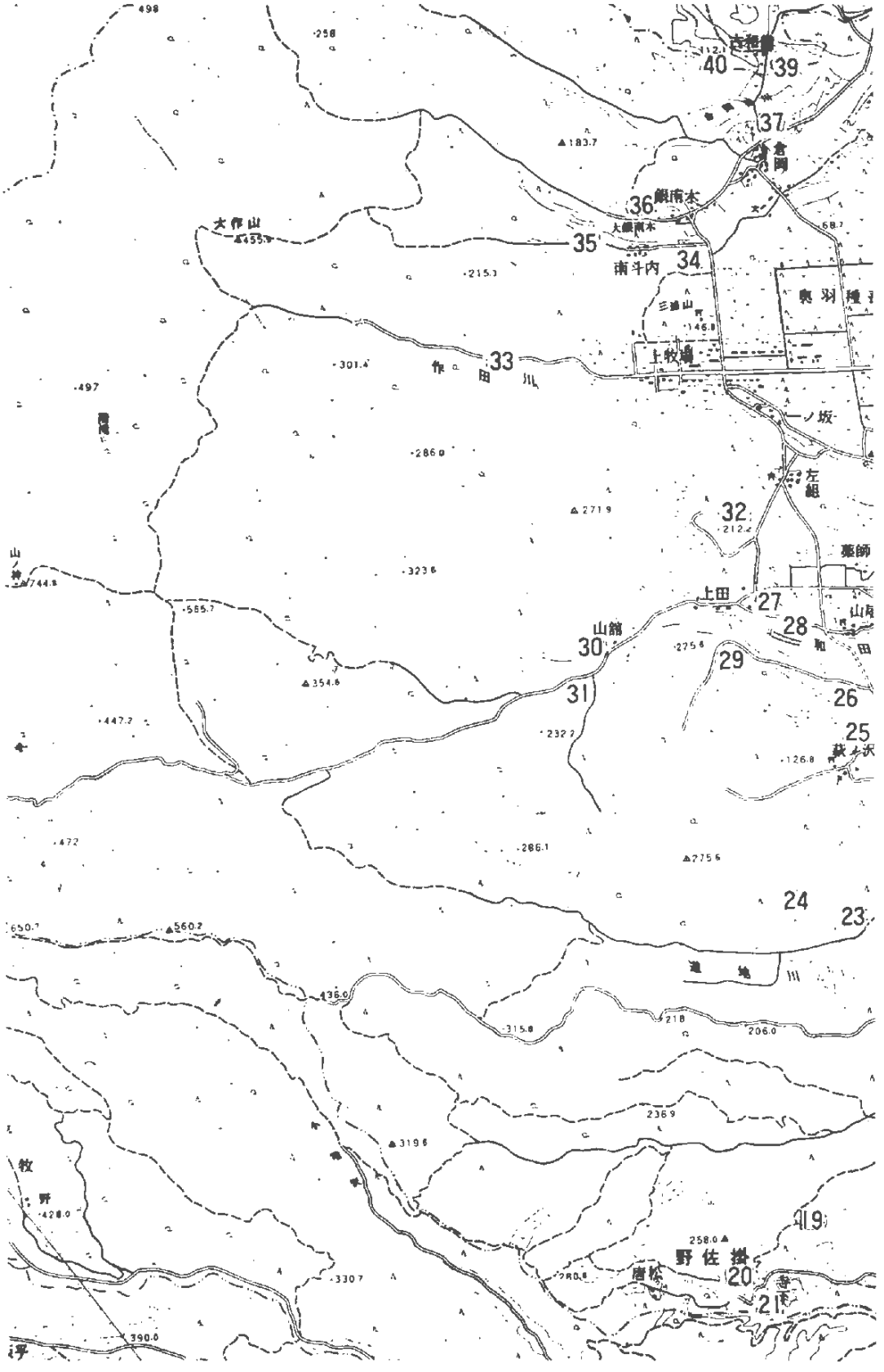
旧石器時代の遺跡は、火山灰層に埋まっていることが多く、その数も少ないために七戸町内ではまだ発見されていない。県内では東通村物見台・野辺地町目ノ越・蟹田町大平山元Ⅱ・今別町中宇田・金木町相野山・弘前市大森勝山・東北町長者久保遺跡等が知られている。長者久保遺跡は出土石器の組成から判断して、旧石器時代の最終末から縄文時代の初期に位置づけられるものと考えられる。

編　年　表

	時代区分		関東	東北南部	青森県	七戸町の遺跡
A.D. 300	弥生時代	後期中期	弥生町 野沢	桝形囲 福浦島下層	田舎館式 二枚橋式	
		前期／晩	千網 杉田	大洞A′ 〃A 〃C₂	大洞A′ 〃A （亀ケ〃C₂	寺下(2) 道地(1) 〃(2)
B.C. 300	縄文時代	期	安行Ⅲc 〃Ⅲb 〃Ⅲa	〃C₁ 〃B-C 〃B	岡〃C₁ 式）〃B-C 〃B	山屋(2) 放森(2)
1,000		後期	安行Ⅱ 〃Ⅰ 曽谷 加曽利B 堀之内 称名寺	新地 宝ケ峰 南境	十腰内Ⅴ 〃Ⅳ 〃Ⅲ 〃Ⅱ 〃Ⅰ 大曲Ⅰ	寺下(2) 南斗内(2) 西槻の木 銀南木 槻の木沢館 野佐掛 長久保 道地(1) 奥羽種畜牧場
1,800		中期	加曽利E 3 〃2 〃1 阿玉台：勝坂 五領ケ台	大木10 〃9 〃8b 〃8a 〃7b 〃7a	榎林(最花) 円筒上層e式 〃d式 〃c式 〃b式 〃a式	矢倉
2,800		前期	諸磯c 〃b 〃a 黒浜 関山 花積下層	大木6 〃5 〃4 〃3 〃2b 〃2a 〃1 宝浜	円筒下層d式 〃c式 〃b式 〃a式 ムシリⅢ	作田 矢倉 見町(2) 寺下(1) 都平(1) 〃(2) 放森(2)
4,800		早期	茅山 野島 田戸上層 〃下層 三戸 花輪台 井草	表素山 槻ノ木下層 明神裏Ⅲ 大寺	早稲田Ⅴ 赤御堂 （早稲田Ⅳ） ムシリⅠ 物見台 ＋ 吹切沢 寺ノ沢 白浜	上町野
7,500		草創期	大谷寺 橋立	一ノ沢 日向	鴨平(2) 大平山元Ⅰ	
10,000	旧石器時代				大平山元Ⅱ 物見台	


向中野
中野
手代森
荒熊内開拓
荒熊内
長久保
上野崎
下野崎
牧場
鶴児平
下牧場
大沢
長沢
蛇塚
舘森
沢花
大池
倉越
柏葉町
作田
八尺堂
向町
川向
蒼前
戸舘
新館
八幡
赤平
南部牧場
八ケ田
和田
西野
川去
宇久保
北野
下町
見町
下見町
別曽
横長根
荒屋
荒屋平
中村
五十貫田
洞内
茶屋
沼ノ沢
野左橋
小田
上羽立
下羽立
三間木沢
七戸

七戸町の遺跡分布図


40
39
37
倉岡
36
銀南本
大銀南本
35
南斗内
34
大作山
奥羽線
33
作田川
上牧場
一ノ坂
左組
32
上田
27
28
山舘
30
29
31
26
25
24
23
道地川
19
野佐掛
唐松
20
21

七戸町遺跡一覧表

番号	名　　称	所在地	種別	時　代	出土遺物他
1	七戸城跡	七戸	城跡	歴　史	
2	荒熊内遺跡	荒熊内62の1	住居跡	〃	
3	十三杜平遺跡	寒水70	〃	歴　史	土師器片
4	大池館遺跡	大池	〃	〃	
5	倉越遺跡	倉越59の2	包含地	歴　史	土師器片
6	上町野遺跡	上町野	配石遺構、散布地	縄文(早) 歴　史	縄文土器片（尖底土器）、炉跡、土師器片、竪穴住居跡
7	いたこ塚遺跡	唐松	墳墓	歴　史	
8	大林遺跡	大林88の4	住居跡	歴　史	土師器片、羽口
9	作田遺跡	作田	包含地	縄文(前)	縄文土器片（円筒下層式）、石剝片
10	矢倉遺跡	矢倉	〃	縄文(前・中)	〃
11	西槻ノ木遺跡	西野	〃	縄文(後) 歴　史	縄文土器片、土師器片、須恵器片
12	槻ノ木館遺跡	〃 西槻ノ木	館跡	歴　史	土師器片
13	見町遺跡(1)	見町	〃	〃	
14	〃　(2)	〃　56の25	包含地	縄文(前)	縄文土器片（円筒下層式）
15	荒屋遺跡	荒屋	〃	歴　史	土師器片
16	中村館遺跡	中村	館跡	〃	
17	槻ノ木沢遺跡	槻ノ木沢20	配石遺構	縄文(後)	縄文土器片、配石遺構
18	野佐掛遺跡	野佐掛1	〃	〃	縄文土器片、石斧
19	長久保遺跡	長久保74	〃	〃	〃　、石棒
20	寺下遺跡(1)	寺下49	〃	縄文(前) 歴　史	〃　、土師器片
21	〃　(2)	〃	〃	縄文(後・晩)	縄文土器
22	清水頭遺跡	清水頭12	散布地	歴　史	土師器片
23	道地遺跡(1)	道地	包含地	縄文(後・晩)	縄文土器片、磨石、石鏃、石皿、石匙
24	〃　(2)	〃　74	〃	縄文(晩)	縄文土器片

25	都平遺跡(1)	都平	配石遺構	縄文	縄文土器、配石遺構、積石墳墓
26	〃 (2)	〃 57	包含地	縄文(前)	縄文土器片
27	山屋遺跡(1)	山屋	〃	歴史	偏平小石
28	〃 (2)	〃	包含地	縄文(後・晩)	縄文土器、石皿
29	西野遺跡	西野	住居跡	縄文(後)歴史	
30	山館遺跡	山館18	経塚墳墓	歴史	
31	館矢沢遺跡	山館	包含地	〃	土師器片
32	左組遺跡	左組144	墳墓	歴史	陶製壺
33	奥羽種畜牧場遺跡	鶴児平	散布地	縄文(後)	縄文土器片、石匙
34	南斗内遺跡(1)	銀南木	包含地	〃	縄文土器
35	〃 (2)	〃	〃	縄文(後)	〃
36	銀南木遺跡	〃 50	〃	〃	〃
37	古屋敷遺跡	古屋敷	〃	歴史	土師器片
38	治部袋館(じんぼだて)遺跡	放森7の8	住居跡	〃	〃
39	八幡下遺跡	八幡下	〃	〃	
40	倉岡遺跡	倉岡	配石遺構		
41	膝森遺跡(1)	膝森	住居跡	歴史	
42	〃 (2)	〃	〃	〃	
43	放森遺跡(1)	放森	〃	〃	
44	〃 (2)	〃	包含地	縄文(前・晩)歴史	縄文土器片、土師器片、鉄製品片
45	〃 (3)	〃	〃	弥生歴史	弥生式土器片、土師器片、石核他

第二章　縄文時代

弓矢を使用して動物を狩り、縄文土器を製作した時代を縄文時代と呼んでいる。その年代は放射性炭素によって測定した数値によると、紀元前一万年位から紀元前後ころまでのおよそ一万年間続いたとされている。この縄文時代を、使用された道具やその文化内容によって、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に区分するのが普通である。

第一節　草　創　期

草創期は旧石器時代に続く時期であり、縄文時代でも最も古く、土器が初めて作られたときである。その年代はおよそ紀元前一万年から四〇〇〇年位続いたとされている。

青森県内ではこの時期の遺跡として、蟹田町大平山元Ⅰ遺跡と南郷村鴨平(かもたい)(2)遺跡の二カ所が知られているだけである。

大平山元Ⅰ遺跡は、昭和五〇年から五一年にかけて県立郷土館の発掘調査で確認された。この遺跡からは石器

四〇点とともに、小破片ではあるが土器片三二点が出土している。土器の文様には、粘土の貼り付けによると思われる隆線をもつものが一点ある他はすべて無文であり、縄文土器の特徴である縄文文様はまだ付けられていない。底部は平らである。これらの土器の形は小破片のためはっきりしないが、平底の鉢形を呈するものと思われる。四〇点ある石器の内訳は局部磨製石斧一点、打製石斧二点、尖頭器五点、石鏃石錐各一点他である。一点だけであるが石鏃が出土していることは、飛び道具である弓矢の使用がこの時期に始まったことを意味している。

南郷村鴨平(2)遺跡出土爪形文土器

鴨平(2)遺跡は東北縦貫自動車道一戸――八戸線建設工事に先立ち、昭和五六年青森県教育委員会が発掘調査した。その結果、約八六〇〇年前といわれる地層（南部浮石）よりさらに古い地層から土器片八二点、石器剝片五点が発見された。これらの土器片には横位に爪形をした文様が付けられており、出土層位と文様から草創期の遺物であることがわかった。器形は口縁が平らで、口頸部はほぼ直立し、胴部の張りが少ない小形の鉢形土器と思われる。

このように草創期の人々は土器を製作するようになったが、土器は火にかけて煮炊きに利用したり、食料の貯蔵用としても利用できるものである。食物の貯蔵が可能になり、人々の生活にゆとりがでてきた

といえよう。

第二節　早　期

七戸町で確認されている四五遺跡のうち、最も古いのが上町野遺跡であり、紀元前六〇〇〇年頃といわれるこの早期に位置づけられる。隣接する町村では、天間林村大平遺跡・上北町新館遺跡が同じ時期の遺跡である。

早期の人々が使用した上器は、底が尖っていることが特徴であり、一般に尖底土器と呼ばれている。土器の文様には貝殻を突き刺したり、押しつけた貝殻文や、竹や棒等を使ってつけられた文様が多くみられる。縄文土器の最大の特徴である縄目の文様は、早期末になってようやくつけられるようになる。

早期の住居跡は、八戸市長七谷地貝塚や東通村下田代納屋B遺跡などで明らかにされている。

縄文時代の住居跡は、直径四、五メートルの円形のものが多く、地面を五〇センチメートル位掘り下げた竪穴住居である。住居跡の平面形には、円形・楕円形及び方形の三種が認められている。柱は床面に直接立てた、いわゆる掘立柱であり、屋根は草ぶきであったと考えられる。炉は住居内に認められないものもあるが、大部分床面のほぼ中央にある。

早期の土器は底が尖っているので、炉に突き刺したり、まわりを石で支えて転ばないようにして、煮炊きに使用したであろう。

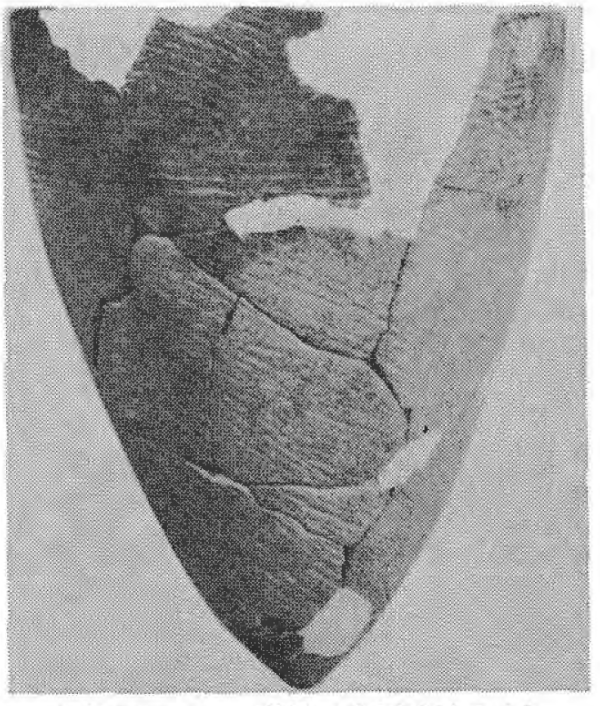
八戸市是川遺跡に復元された円形の竪穴住居

東通村下田代納屋Ｂ遺跡で確認された隅丸方形の竪穴住居跡（早期）

上町野遺跡（遺跡番号6）

縄文時代の遺跡は、一般に現在水田として利用されている河川流域から一段高くなった台地の縁辺部に確認されるが、七戸町の遺跡もほとんどがそうである。現在の市街地は七戸川が蛇行していた地域であり、遺跡は発見されない。また、海岸から遠いため貝塚も残されていない。

七戸町で最も古い上町野遺跡は、七戸市街の北側北口の急坂西側の台地にある。この遺跡からは早期の土器の尖底部破片が出土している。



尖底土器（六ヶ所村千歳(13)遺跡出土）

第三節　前期・中期

前期は紀元前約五〇〇〇年前からといわれるがこの時期になると、七戸町では遺跡の数が急に増加してくる。作田・矢倉・寺下(1)・都平(2)を含む六遺跡が知られている。

これらの遺跡から出土する土器は、土管の一方に底をつけたような形をしていることから「円筒土器」と呼ばれている。

土器は大形で器壁は厚い。土器の表面には、さまざまに工夫した縄目の文様がつけられたり、また粘土紐による貼り付けも行なわれ豪華な印象を受ける。

天間林村二ッ森貝塚はこの時期のものであるが、この貝塚からは縄文時代の人々が食料にしたと思われるさまざまな動物の骨や貝が出土しているので、次に列記してみよう。

（貝類）　サルボウ・ヤマトシジミ・ハマグリ・アカガイ・ホタテガイ・マガキ・アサリ・オオノガイ・サザエ等二五種

（魚類）　ボラ・スズキ・マダイ・クロダイ・フグ・ヒラメ・サメ・ウグイ・カサゴ以上九種

（哺乳動物）　ニホンジカ・イノシシ・ノウサギ・ツキノワグマ・イヌ・タヌキ・クジラ・アシカ・ムササビ以上九種

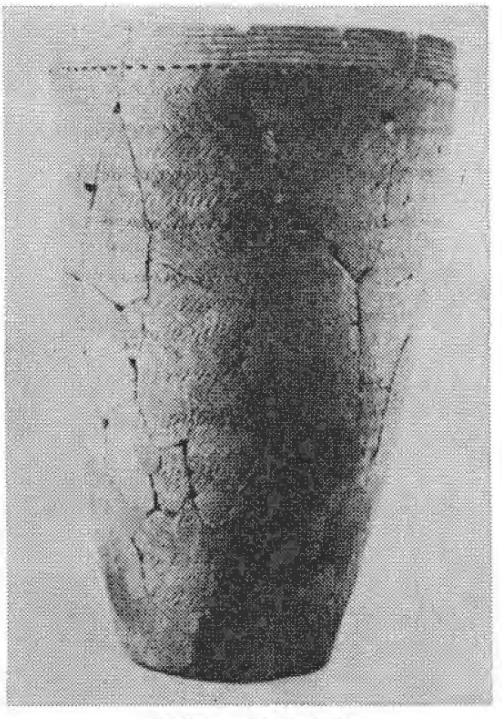
（鳥類）　カラス・ハクチョウ・マガン・カモ・ヒメウ・カイツブリ・キジ以上七種

これらの中では、もう本県では棲息していないシカやイノシシが圧倒的に多い。二ッ森貝塚からは発見されなかったが現在でも周辺の川に遡上するサケやマスも重要な食料であったと思われる。

植物性食料としては、クリ・クルミ・ドングリなどの木の実やヤマノイモ・テンナンショウなどイモ類が考えられる。およそ食料にできるものはなんでも採集したことであろう。

八戸市是川遺跡や木造町亀ケ岡遺跡の泥炭層からは、炭化したクルミ・クリなどが発掘されている。保存食料として貯蔵穴に貯えられていたまま発掘される例もある。

動物を狩る方法としてよく知られているのに弓矢の使用がある。大形の動物には矢にトリカブトなどの毒を塗ったものが使用されたとも考えられる。昭和五六年、県教育委員会が発掘調査した八戸市鶉窪遺跡からは明らかに動物の落し穴と思われる遺構が発見された。また、六ケ所村発茶沢遺跡や八戸市長七谷地貝塚などで発見されている多くの溝状遺構も狩猟のための落し穴であったともいわれている。

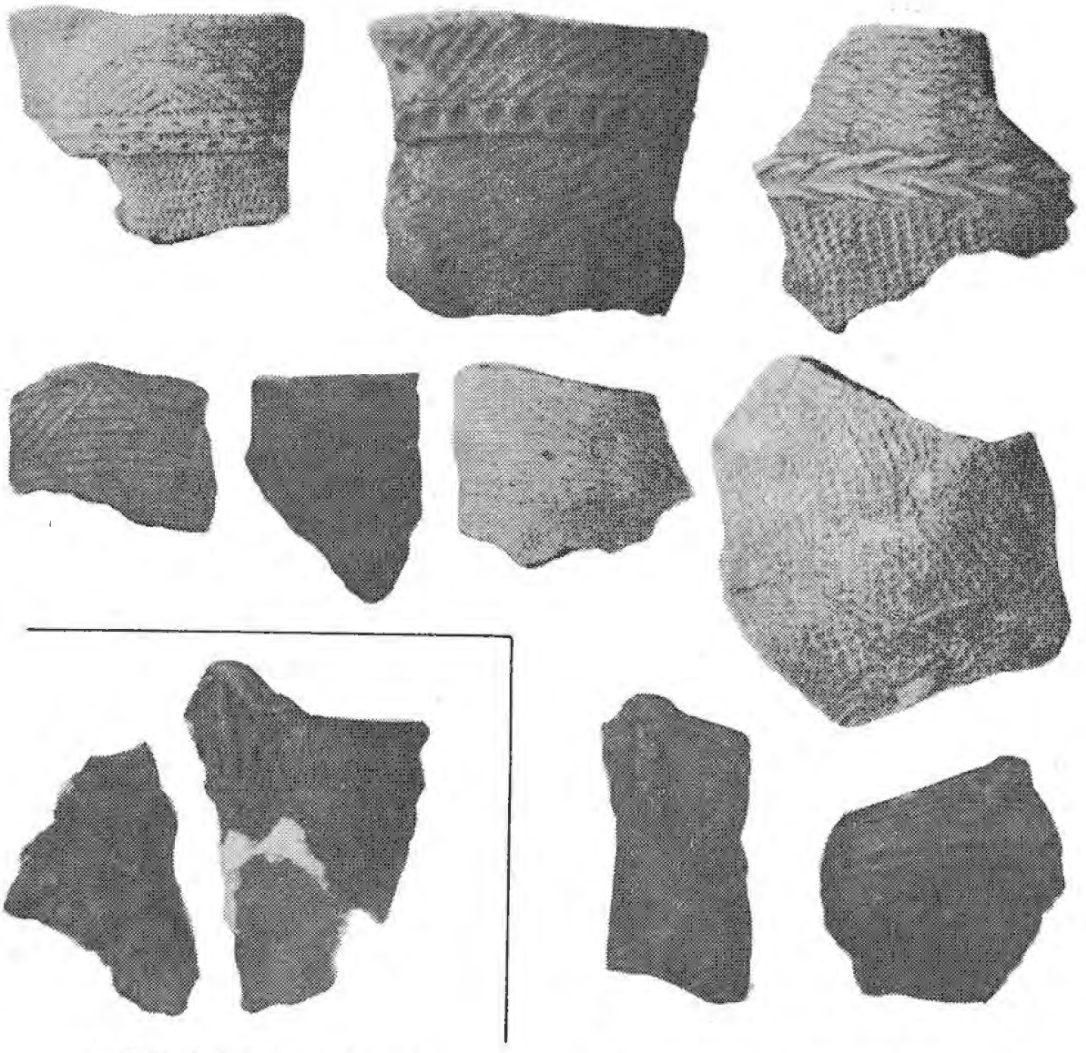


前期の円筒土器
（天間林村二ツ森貝塚出土）

石皿やすり石は、植物性食物の調理道具として使用されたものであろう。

作田遺跡（遺跡番号9）

今から五〇〇〇年以上前の人々が住んだ場所である作田遺跡は、作田部落東方三〇〇メートル、標高約三〇メートルの台地南斜面にあり現在は山林である。この南斜面一帯は遺跡としての立地条件がよいので、かなりの広範囲にわたっているものと推測される。長い間、山林として利用されてきたため、ほとんど破壊されず昔のまま



矢倉遺跡出土土器（中期）　　作田遺跡出土土器（前期）

残されていると思われる。

放森(2)遺跡（遺跡番号44）

倉岡川南側治部袋部落東方約三〇〇メートルの台地先端部にある。現在、長芋畑として耕作されている。縄文時代前期・晩期の土器片や、平安時代のものと思われる土師器片が散在している。

矢倉遺跡（遺跡番号10）

和田部落南西、和田川にかかる橋を渡った西方に位置する。現在は山林である。七戸町唯一の縄文時代中期の遺跡である。

作　田　遺　跡

放森(2)遺跡

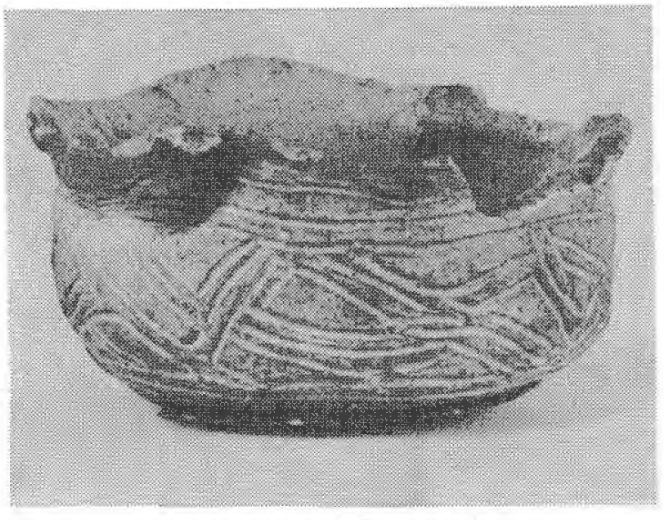
第四節　後　　期

縄文時代後期になると土器は、それまでの深鉢形土器一辺倒から、寺下(2)遺跡から出土しているような浅鉢・台付浅鉢・壷・注口土器等多種多様となり、今日みられる器種のほとんどがこの時期に作られている。また、日常の容器としては使われず、特殊な儀式の時に使われたと思われる土器が多く出土するようになる。縄文時代の人々の生活に大きな変化が起き、この時期に生活が複雑化したことがうかがわれる。

七戸町内で確認されている縄文時代の遺跡二〇カ所のうち、半数の一〇カ所がこの時期の遺跡である。土器の文様には、表面をきれいに磨いた後、竹や棒で線を引いたいわゆる沈線文が付けられるものが多い。

後期以後、生活が複雑化したと記述したが、そのひとつの例は葬制である。前期や中期においても特殊な状態で出土する深鉢形土器もあり、埋葬用として二次的に使用された可能性のある土器もある。しかし、後期になると明らかに埋葬に使用する目的で作られた土器が認められている。

六ケ所村原々種農場で発見された甕棺(かめかん)には二〇才前後の女性の骨が埋葬



鉢形土器（荒屋平出土）

上　左の甕棺に埋葬された頭骨の肉付復元図

左　六ケ所村原々種農場遺跡出土の甕棺

下　倉石村薬師前遺跡人骨出土状況

されていたし、昭和四六年、農作業中偶然見つかった倉石村薬師前遺跡の甕棺には、四〇才前後の男の人骨がほぼ完全な形で残されていた。これらの人骨は、死亡した後一定期間埋葬し、白骨化したころ再び掘り起こして骨だけを甕棺に再埋葬されたものである。

この地方では近年まで土葬が行われていたが、縄文人の大部分は土葬であり、特殊な地位にあるほんの一部の人々だけが甕棺に再埋葬されたものと思われる。

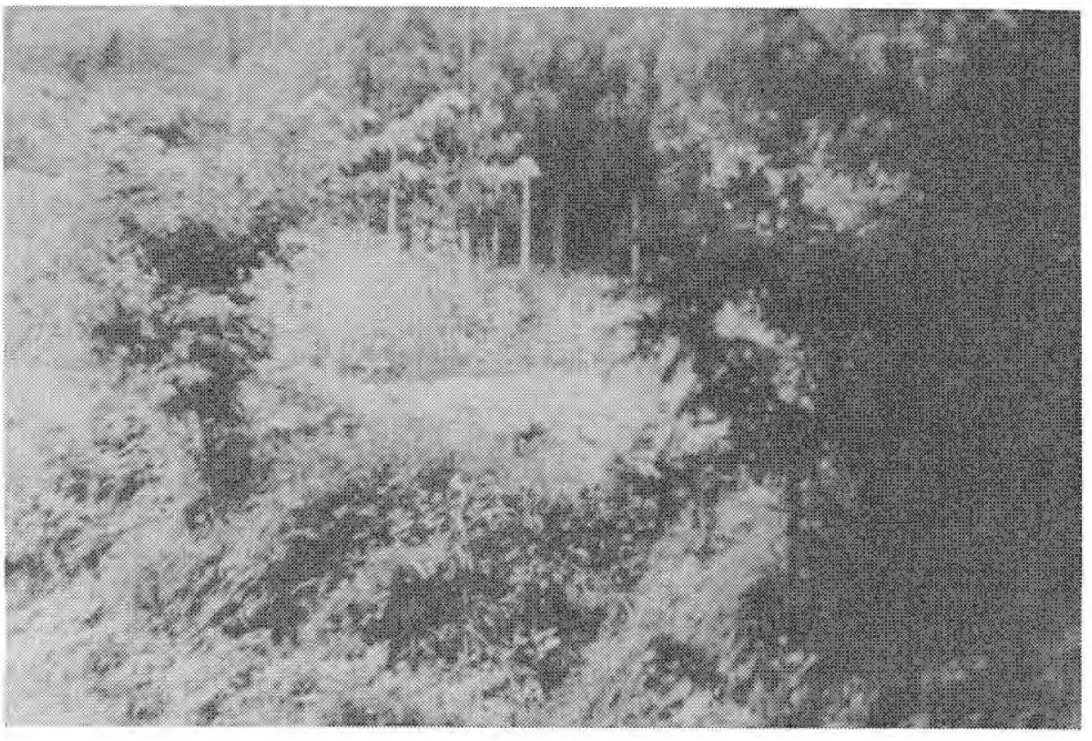
縄文時代の人骨は、ほぼ完全に残されているものから歯の一本しか残っていないものまで含めると、県内だけでも相当な数になる。従来縄文人は、日本人の祖先ではなくアイヌ人の祖先であると考えた人もあった。しかし、これらの骨をいろいろな角度から比較研究した結果、現在では我々日本人の直接の祖先であるとする考え方が一般的である。

槻ノ木沢館遺跡（遺跡番号17）

野左掛部落北方一五〇〇メートルの台地上にあり、現状は山林及び畑地として利用されている。昭和三八年の調査によると、後期の土器片とともに直径約四メートルと一・三メートルの二重の円を描くように礫が配石されていたという。祭祀に関係する場所であったと思われる。

槻ノ木沢遺跡の配石遺構

奥羽種畜牧場遺跡



銀 南 木 遺 跡

寺下(2)遺跡（遺跡番号21）

寺下部落南東五〇〇メートルの水田が遺跡である。後期末から晩期にかけての土器が出土している。青森県内では後期末の遺跡の発見例が少ないので貴重な遺跡といえる。

奥羽種畜牧場遺跡（遺跡番号33）

作田川上流、上牧場の浄水場入口から西方一二〇〇メートルの採草地が遺跡である。草地造成のためブルドーザーで表土が移動しているが、残されたわずかな部分から遺物を採集することができる。

南斗内(2)遺跡（遺跡番号35）

南斗内部落の西側一帯の畑が遺跡である。一部水田になっている所もある。村人の話によると、農作業が機械化されるまでは、土器片がたくさん落ちていたということであるが、現在は小片しか見ることができない。

銀南木遺跡（遺跡番号36）

銀南木部落にある天然記念物イチョウの大木から西方五〇メートル、倉岡川の北側台地上の畑が遺跡である。土器片はこの畑から採集することができる。

道 地 (1) 遺 跡

山 屋 (2) 遺 跡

第五節　晩　　期

晩期は縄文時代の最後をかざる時期であり、木造町亀ヶ岡遺跡、八戸市是川遺跡で代表される亀ヶ岡文化の花が開いた時である。七戸町では寺下(2)・道地(1)(2)・山屋(2)・放森(2)の五遺跡が確認されている。

後期から晩期にかけていろいろな土器が作られているが、これらは精製土器と粗製土器の二種に分けることができる。

精製土器は製選された粘土を用い、薄く、ていねいに作られている。文様もいろいろ工夫されたものがみられる。土器の表面にベンガラが塗られ、赤色を呈する土器もかなりな比率を占めている。二〇〇〇年を経た今でも鮮やかな色を保っているものがあることから推測すると、製作当時の美しさは目を見張る程であったことだろう。

縄文時代は一面呪術に支配された社会であったともいわれるが、精製土器はそのような晴の儀式のために作られたものと思われる。

粗製土器には深鉢形をしたものが多く、日常の汁器として使用されたものである。土器表面には縄目の文様がつけられるか、あるいは口縁近くに、横に数本の沈線が引かれているだけである。煮炊きの際ふきこぼれた汁の炭化物が付着している土器もしばしばみられる。

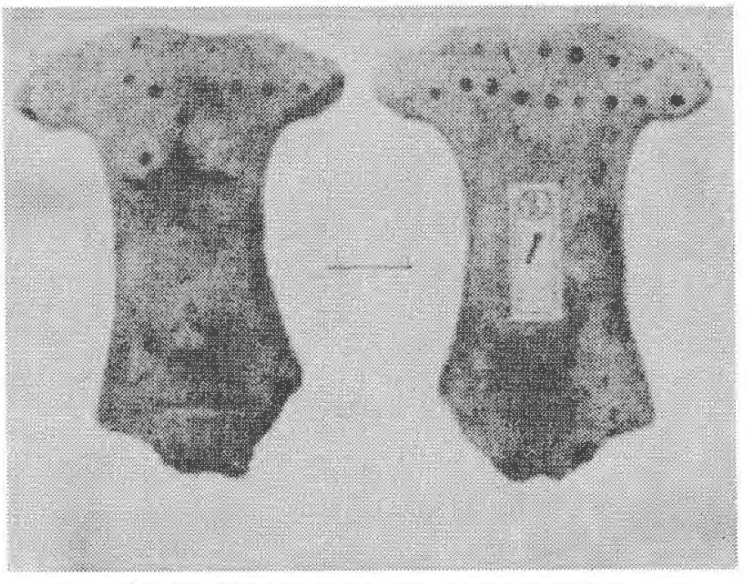
縄文時代は呪術に支配された社会であったと記述したが、山屋(2)遺跡から発見されたいわゆる遮光器土偶（ロ

絵カラー写真）はそれを裏付けるものである。この土偶は昭和五二年四月、土地所有者である和田昇一が農作業中、他の鉢形土器や壺形土器と一諸に偶然発見されたものである。腰から下部の破片は一片もなかったが、残存する部分の高さは約二九センチメートルである。それから推定すると当初の高さは四〇センチメートルを越えるものであったと思われる。完全な形で発見されたならば、重要文化財に指定されている亀ヶ岡遺跡出土の土偶に匹敵するものである。

土偶は完全な形で出土することは極めてまれであり、この土偶のように体の一部を欠いて発見される例が圧倒的に多い。また、そのほとんどがベンガラを塗られていることやその異様な形状から、生産や豊饒を祈る地母神崇拝のための像であるとする説や、死者への副葬品、あるいは身体の一部を負傷した時、土偶の一部を打ち欠いて身代りにする説などが考えられている。

いずれにしろ、日常使用されるものではなく、ある特殊な場面にだけ使用されたものと考えられ、縄文人の精神生活の一端を今日に伝えてくれる貴重な遺物といえよう。

縄文時代の人々の衣類は、その材質が腐食しやすいため、直接裏づける出土資料が殆んどなく、正確に記述することは難しい。しかし、気候は現在とそれ程変わっていないことから、この地方の寒さを凌ぐにはどうしても



頭部と両足を欠く土偶（荒屋平出土）

防寒用の衣服を身につけたと考えざるを得ない。

動物の皮に孔を開けるために使用されたと思われる石錐、縫物用の骨針などが出土していることや、土器につけられた縄目の文様から推測して、縄あるいは紐が一般に普及していたことが考えられる。また、土偶の中にはパンツをはいたようなものがあるし、三戸町泉山（いずみやま）遺跡からは編物痕のような粘土残片も発見されている。これらは、縄文人が動物の皮や植物性の繊維を利用した衣服を身につけていたことをうかがわせる。

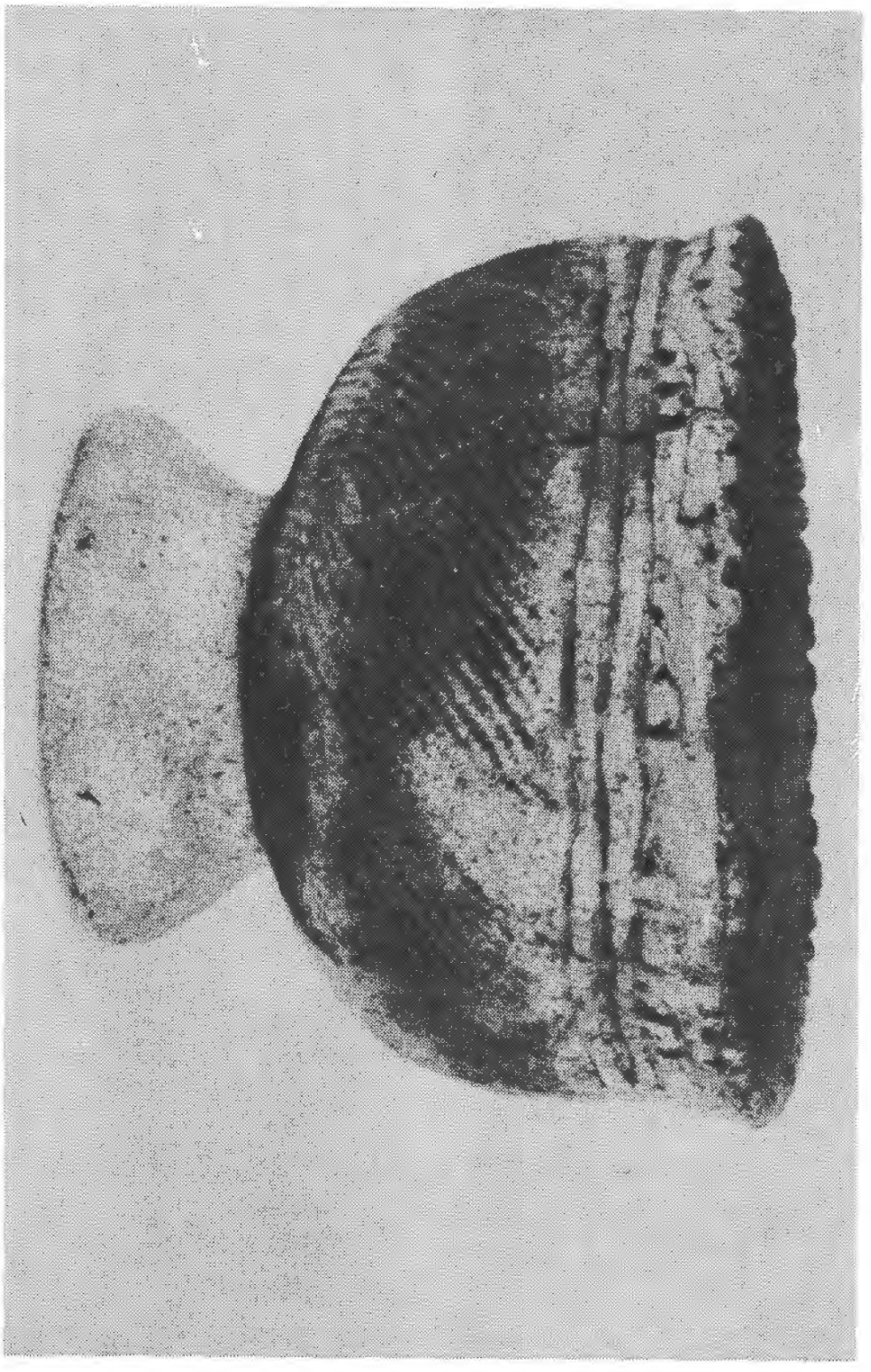
道地(1)遺跡（遺跡番号23）

道地部落西方に続く畑地が遺跡であるが、この場所は古くから寺屋敷とも呼ばれている。長いも栽培のため深くトレンチャーをかけられた所もあり、多数の土器片や、すり石・石片が畑表面に散布している。

山尾(2)遺跡（遺跡番号28）

山屋部落西南の畑が遺跡である。一部はりんご園に利用されている。前述した大土偶の出土した遺跡であり、完形の土器も多数出土している。その中に非実用的な小形の注口土器や、赤くベンガラの塗られた皿形土器の破片も混じっていることからすると、この遺跡は亀ケ岡遺跡や是川遺跡と同様、特殊な遺跡と考えられる。

なお、ここからは後期の遺物も出土しており、後期から晩期にかけて営まれた遺跡である。



台付鉢形土器（山屋(2)遺跡出土）

土を耕して作物を栽培する農耕技術は、弥生時代になって大陸から伝来したものであり、縄文時代には農耕がなかったという説が今日まで一般的である。なるほど、現在のような農耕文化は弥生時代以降に行われるようになったものかも知れないが、あの亀ヶ岡文化を支えた人々が食料のすべてを狩猟・漁労・採集という自然まかせであったとは考えにくい。原始的な畑作農業は縄文時代にもすでにあったのではないかと考えたい。

第三章　弥生時代

縄文文化がようやく衰退にむかっていた紀元前三世紀ごろ、大陸から北九州に新しい文化が伝播し、弥生時代に移行する。この弥生文化は稲作栽培・機織・金属器の使用を特徴とするものであり、次第に関東から東北地方へと広がってきて、本州北端に位置する本県に伝播したのは紀元前後頃と思われている。

本県の弥生文化研究の発端となったのは田舎館村垂柳（たれやなぎ）遺跡である。この遺跡からは昭和三一年から三三年にかけて多量の田舎館式土器が発見されたが、その中に籾痕のついた土器が含まれていたのをはじめ、焼米も検出されたことから、東北大学伊東信雄は当時すでに青森県においても稲作栽培が行われたと考えたのであった。

しかし、今日でも冷害が時々おこる東北北部で、二〇〇〇年も以前に稲作が行われたとする説に対して、ただちに信じることができないとする人も多かった。機織や金属器の使用は認めるとしても稲作栽培は認めがたいと

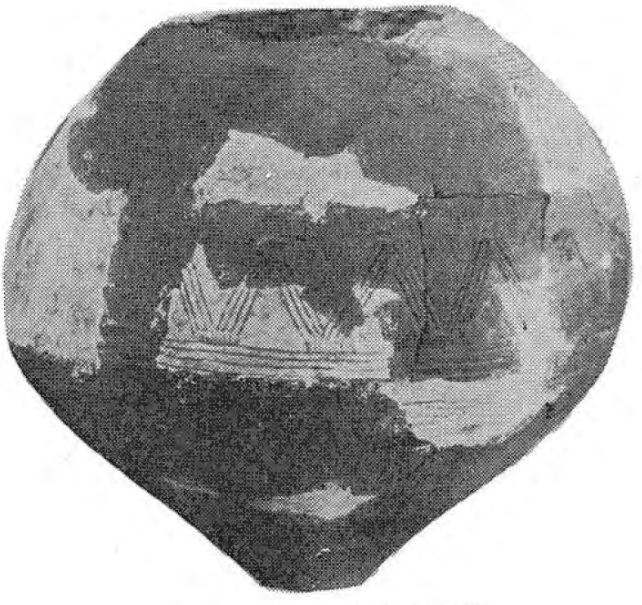
し、全面的に弥生文化を受け入れたものではないので続縄文文化と呼ぶべきだという説も唱えられてきた。

たまたま、昭和五六年一一月、県教育委員会がこの垂柳遺跡を試掘調査した際、弥生時代の水田跡が確認されたため稲作が行われていたことが決定的となったものである。それにしても、二〇〇〇年前に今日のごとく、いたる所で稲作が栽培されたとは考えられず、気候条件もよく、また水利の便もよい、ごく一部の地域に限られていたと考えるのが妥当であろう。

弥生時代の住居跡は、脇野沢村瀬野（せの）で一軒調査されている。それによると、平面形はほぼ円形を呈しており、縄文時代によくみられる竪穴住居とそれ程変わってはいない。食生活においては稲作が行われたことは前述したが収穫量は多かったとは考えられず、縄文時代と同様、狩猟・漁労・植物採集にたよる方が多かったといえよう。

また、葬制の面でもやはり縄文時代のそれと同様土壙墓（どこうぼ）と甕棺墓（かめかんぼ）が知られている。ただ、同じ墓域内にあっても副葬品の質や量に差が認められることは、すでに階級社会に進んでいたことを物語るものだろうか。

本県弥生文化時代の土器の特徴は沈線が鋸歯状につけられることであるが、縄文時代の名残りをとどめて縄文もつけられており、西日本の弥生式土器と比較すると大きな差が認められる。



十和田市出土弥生式土器

七戸町からは弥生文化の遺物を出土する遺跡はまだ確認されないが、十和田市や六ケ所村では発見されている。縄文時代の遺跡は二〇カ所もあり、また古代の遺跡も相当あることを考えれば、今後調査が進むにつれて必ずや発見されることと思われる。

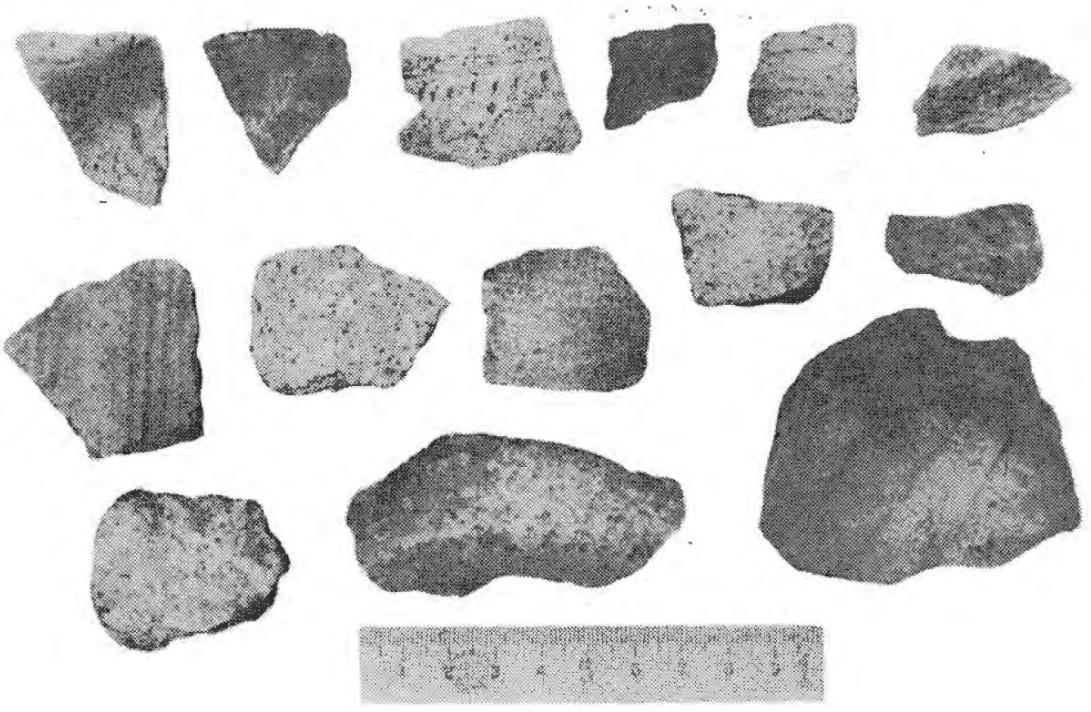
ただ注意しておかなければならない遺跡に放森(3)がある。この遺跡からは表面採集資料であるが、北海道の続縄文文化の影響を受けたといわれる土器片が出土している。細片のため詳述することはできないが、弥生時代末以降の遺物と考えられる。

田舎館村出土籾痕のある土器

第四章　古代・中世

七戸町には以上述べた先史時代の遺跡のほかに、古代あるいは中世の遺跡も相当数確認されている。古代の遺跡には竪穴住居跡と思われる落ち込みがまだ地表面から観察できるところもあり、そういう場所には土師器(はじき)や須恵器(すえき)が散布している。

中世の遺跡は、城あるいは館として今に残されている。七戸城や大池(おおいけ)館・見町(みりまち)館などはその代表である。



放森(3)遺跡出土土器

荒熊内遺跡（遺跡番号2）

荒熊内（あらくまない）開拓部落北西七〇〇メートル、七戸町と天間林村鳥谷部との境界地獄沢に面する一帯が古代の人々が生活していたところである。現在は道路東側の山林に、当時の住居と推定される落ち込みが一基残されているだけであるが、周辺の畑地内には多くの落ち込みがあったものと思われる。

なお、遺跡内には現出部分が一・五メートル位の巨大な礫がある。この礫はその昔、鬼が八幡岳から小川原湖めがけて投げようとしたところ、誰かが邪魔をして袖を引っぱったため、中間に落ちたものだという伝説が残されている。

長野県にも同様の礫が尖石様（とがりいしさま）として、原始時代から信仰の対象になっているところがあるが、荒熊内では礫のそばに小さな祠（ほこら）が建てられて山の神として信仰されている。

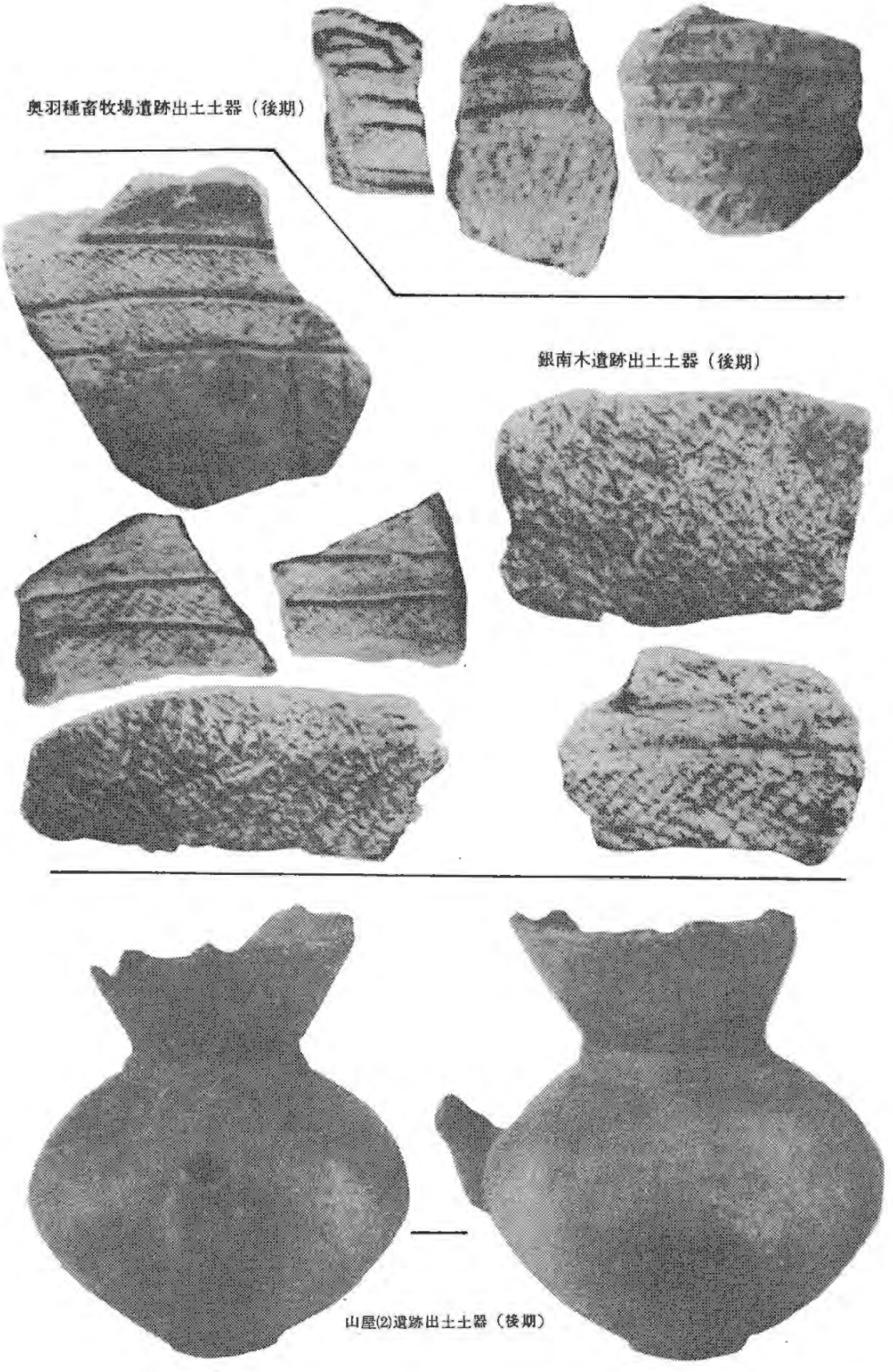
十三杜平遺跡（遺跡番号3）

七戸市内から天間林村花松に行く道路が南部縦貫鉄道の踏

切りを越え、約五〇〇メートル行った北側が遺跡である。畑や山林として利用されているが、竪穴住居跡と思われる落ち込みを三基確認できる。この地域では、十三杜平遺跡南方の膝森(1)や膝森(2)遺跡でも同様の落ち込みが数基確認されており、開墾される前は多くの落ち込みが残されていたものと思われる。

大林遺跡（遺跡番号8）

七戸町南方、大林川北側の台地が遺跡である。現在大部分が七戸高等学校の農場になっているほか、一部は民有地として畑に利用されている。近くに住む人々は「砂子田百穴」と称しており、竪穴住居跡と思われる落ち込みがたくさんあったといっているが、すべて開墾されてしまい現在は確認することができない。土師器片及び鉄滓が出土している。



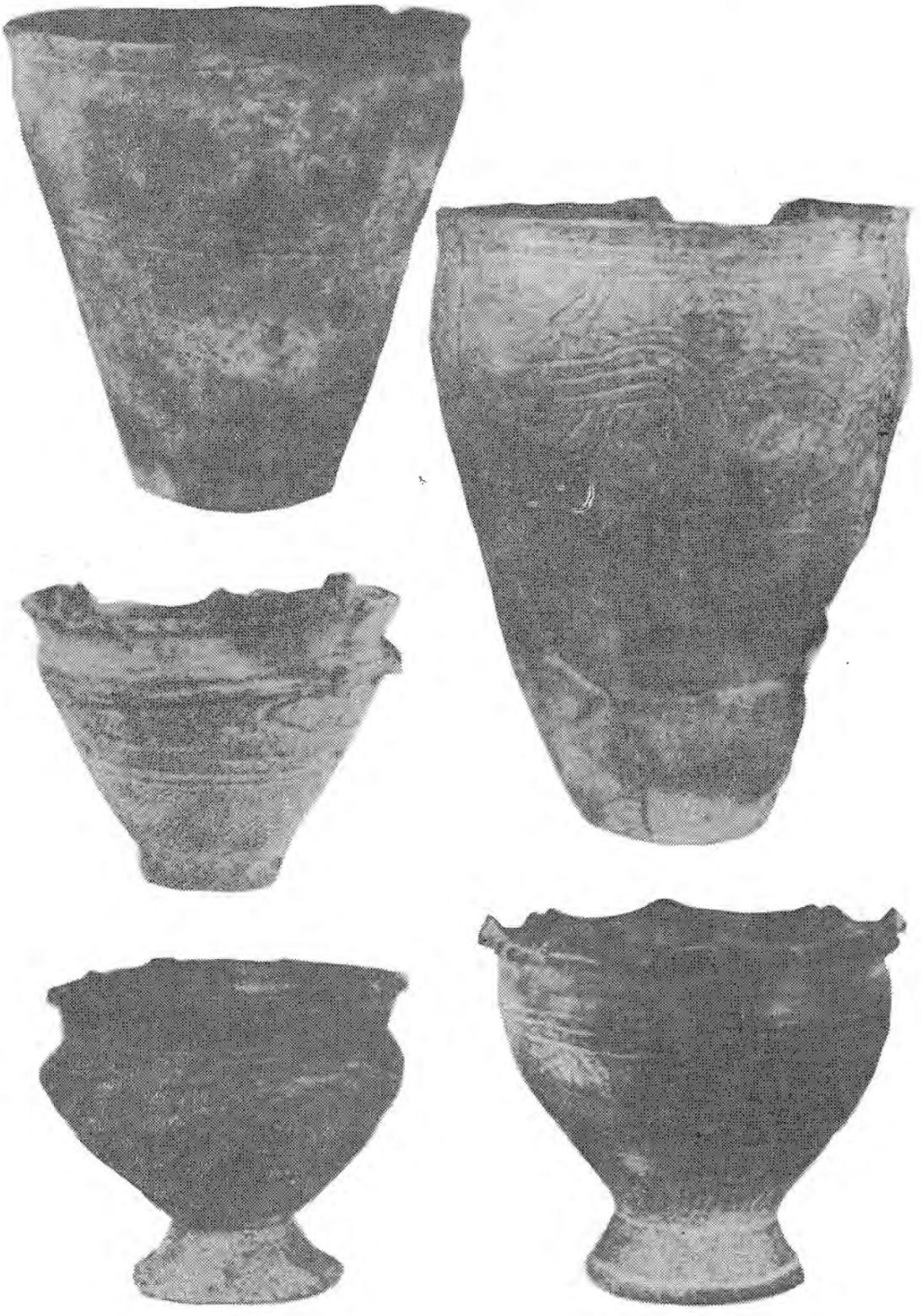
奥羽種畜牧場遺跡出土土器（後期）

銀南木遺跡出土土器（後期）

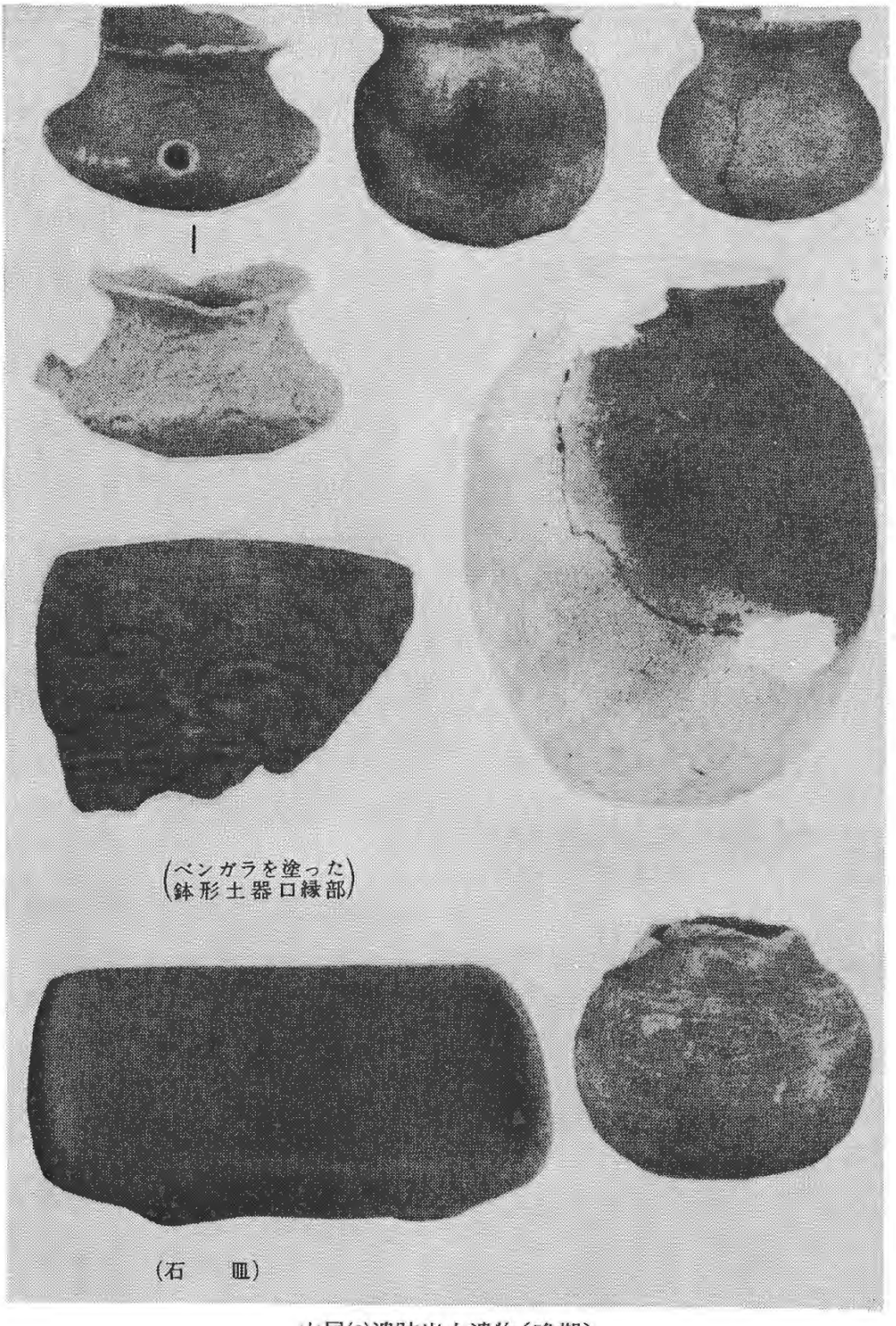
山屋(2)遺跡出土土器（後期）

寺下(2)遺跡出土土器（後期）

寺下(2)遺跡出土土器（後期・晩期）



荒屋平出土土器（後期・晩期）

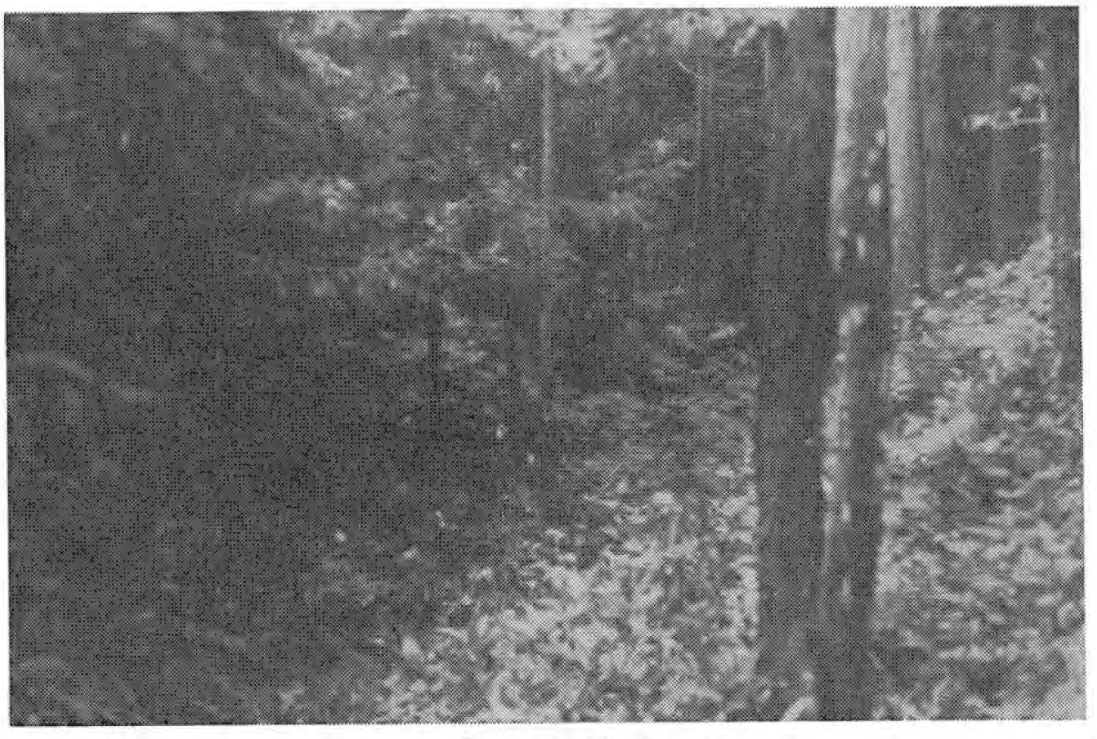


山屋(2)遺跡出土遺物(晩期)

荒熊内遺跡巨大な礫

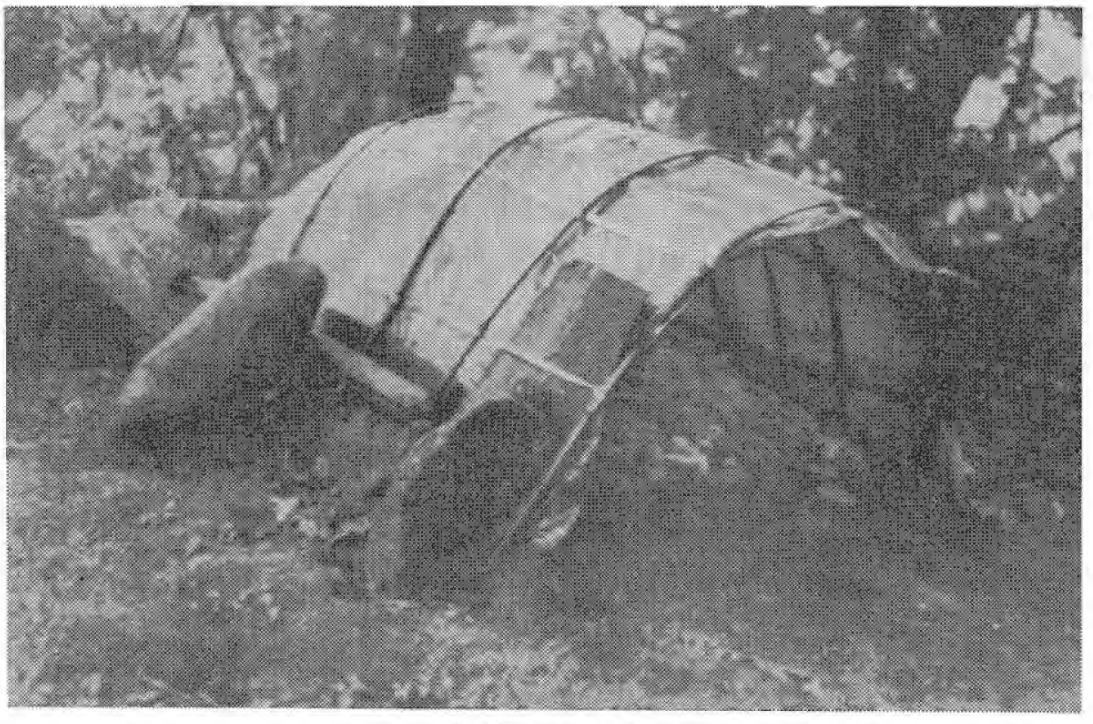
膝森(1)遺跡

清水頭遺跡

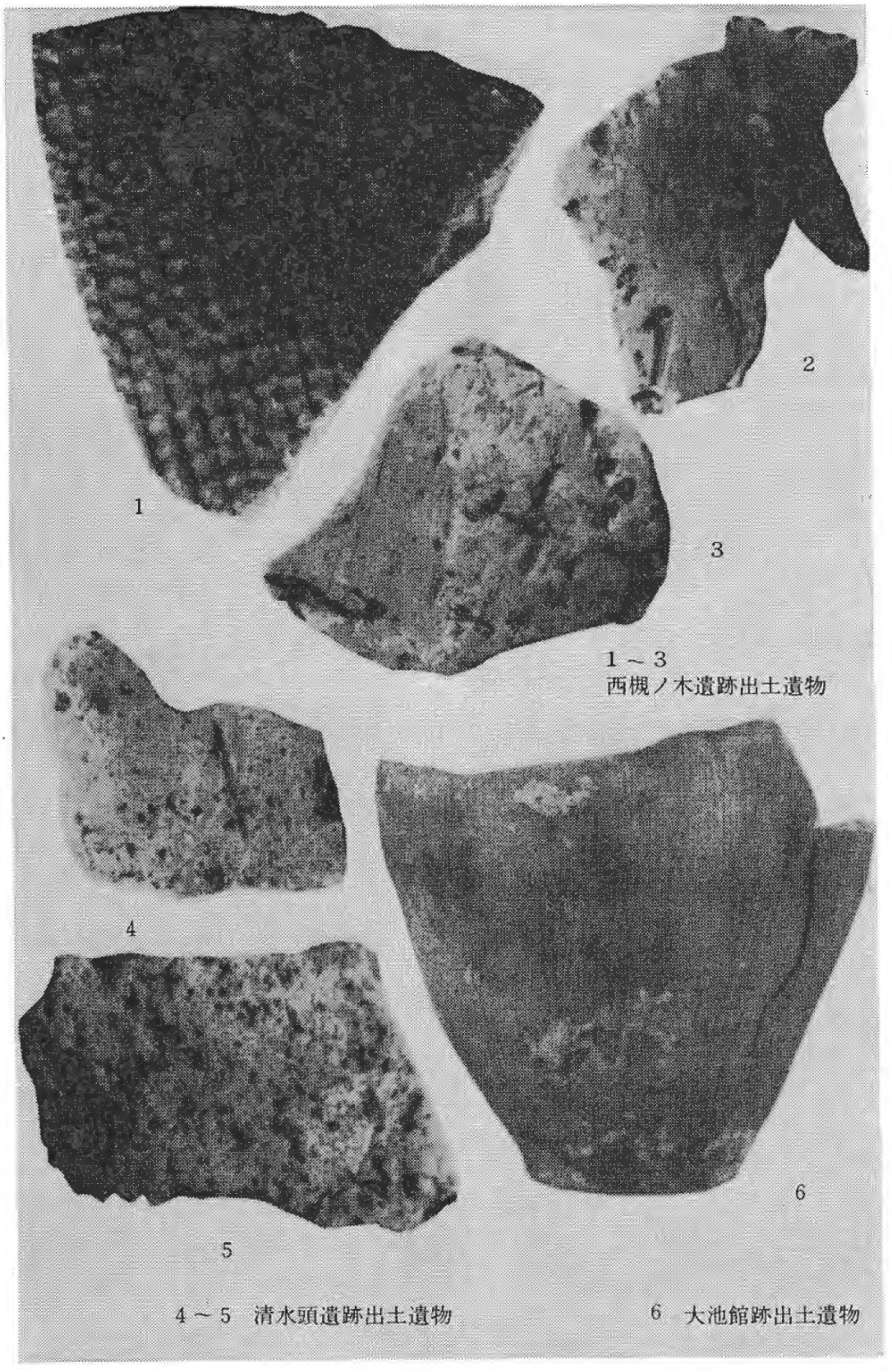


槻ノ木館跡

大林遺跡出土遺物（土師器、鉄滓）



発掘前の山館遺跡



1～3
西槻ノ木遺跡出土遺物

4～5　清水頭遺跡出土遺物

6　大池館跡出土遺物

参考引用文献

村越　潔・小片　保　『青森県二ッ森貝塚発掘調査概要』昭和三七年　青森県教育委員会
山内清男・佐藤達夫　下北の無土器文化――青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告『下北』昭和四二年　九学会編
村越　潔・他　大森勝山遺跡『岩木山』昭和四三年　岩木山刊行会
小片　保・森本岩太郎・江坂輝弥　『青森県表館発見の縄文文化初頭の甕棺と人骨』考古学ジャーナル№63　昭和四六年
須藤　隆　土器組成論『考古学研究』第一九巻四号　昭和四八年
青森県立郷土館　『小田野沢―下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』昭和五一年
青森県教育委員会　『泉山遺跡発掘調査報告書』昭和五一年
鈴木克彦　青森県出土の中世陶器二例『考古風土記』創刊号　昭和五一年
七戸町教育委員会　『山館遺跡（経塚）発掘調査報告書』昭和五二年
村越　潔　『縄文時代の人と生活』昭和五二年
岩本義雄・天間勝也・三宅徹也　『大昔のふるさと』昭和五二年　東奥日報社
青森県教育委員会　青森県遺跡地名表　昭和五三年
青森県立郷土館　『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』昭和五四年
青森県立郷土館　『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』昭和五四年
青森県教育委員会　『長七谷地貝塚』昭和五五年
天間林村　『天間林村史』昭和五六年
東奥日報他各新聞　八戸市鴨平(2)遺跡から爪形文土器が出土したこと及び八戸市鵜窪遺跡から落し穴と思われる遺構が確認されたことを掲載。（昭和五六年一一月二〇日付）